

盛世才政権と日本の大陸政策

松本 和久

1 問題の所在

盛世才は1933年から1942年まで督辦として中国とソ連との間に立ち新疆省を支配した。盛政権の課題の一つは、新疆において多数派であったウイグル人をはじめとする多民族社会の統治にあった。報告者は公刊資料を用いて、盛政権の民族に関する言説の分析を行ったが、興味深い点は日本を敵視する文言が随所に見られることである。無論、当時は日中が全面的に対決した時代にあたり、形式上とはいえ国民党政府の信任を得ていた盛が日本に批判的であったことは怪しむべきことではない。とはいえ、盛政権は新疆省内における日本人の活動を批判する発言を繰り返しており、これについては文献的な裏付けが取れない箇所が多い。そのため、いかにして盛の言動を解釈すべきかという問題が残る。

2 ホブズボームのナショナリズム論

報告者はここで、エリック・ホブズボームのナショナリズム論に注目した。ホブズボーム[2001: 169-201]によれば、近代のナショナリズムの特徴は、国境、選挙等の政治システムに加えて、出版物や映画等のマスメディアの発展と「戦闘的ナショナリズム」の出現という二要素を持つという。後者は、第一次世界大戦後、ドイツの反ヴェルサイユ体制に見られたように、劣勢に立った集団が域外の対立する勢力を憎悪の対象とすることで、自民族の団結を図ろうとするものである。今回の報告においては、日本の大陸政策と盛政権の言説の矛盾をこの概念により説明することを試みた。

3 日本の新疆進出計画

森[2009: 57-58]によれば、日本陸軍が新疆を戦略拠点として認識し始めたのは、1930年代後半であったという。陸軍は日本とソ連との対決を必至と見て、新疆を「防共」の一角を担う地点として想定していた。陸軍及び外務省は中国西北地域への関心を拡大し、外務省職員による調査等の具体的な計画も建議された。ところが、同地域への進入は困難を極め、

実際に工作を行ったことを示す文献は現在のところ確認されていない。外務省の史料等には「大西忠」なる日本人が馬仲英に従って新疆に入ったことが記されているが、素姓は不明であり、軍が正式に関与していたとは考えにくい。

4 「反帝会」の対民族言説

盛世才は、反帝、親ソ、平等、廉潔、建設、和平を柱とする「六大政策」を実施したことで知られる。盛はこれを敷衍する大衆組織として1934年に「反帝会」を結成し、同会の機関紙である『反帝戦線』に盛らの演説や論文等を掲載することで、主張の普及を図った。例えば、盛は「六大政策」の説明として以下の論説を掲載している。

新疆は、帝国主義を肅清し、中国の歴史において未解決であった民族問題を正確に解決した。新疆省は全国に先駆けて輝かしく平和な、唯一無二の省を解放するという職務に到達した [盛 1937: 4]。

また、反帝会の秘書長であった王寿成は1937年4月に開かれた「全疆蒙族代表大会」においてこう述べた。

日本帝国主義は陰謀によって、我々新疆の和平の破壊を計画している。我々は帝国主義者たちが『東トルキスタン共和国』の組織を企図していたことを知っている。我々、新疆の十四民族は一つの兄弟であり、共通の敵は我々を侵略する帝国主義者である [王 1984: 17-18]。

こうした記述の一方で、1933年の東トルキスタン・イスラム共和国の成立に日本が関与したことを示す資料は確認できず、日本の外務省は各地の領事館からの報告によって情報を収集していたに過ぎなかった。こうした日本の「軍国主義」をあからさまに敵視する言説は反帝会の出版物に随所にみることができる。

5 むすびにかえて

上記のように、反帝会の言説は歴史的な事実と一致しない、乃至確認できない箇所が多く、民族の動員を図るための政治的な言説である可能性が高い。盛政権の言説の特徴は、活動実体の乏しい日本を外部の敵として設定し、容易に内乱へとつながる危険性を含んでいた民族を団結させる、一種の「戦闘的ナショナリズム」を鼓舞するものであったといえる。今回の報告では、史料調査は不十分であり、かつ盛政権が意図したナショナリズムの範囲はどこまでであったかという課題が残された。今後、一次資料の発見や思想的な文脈の定義を明確化し、より精緻な論考としたい。

参考文献

王寿成 1984 「關於新政府民族政策的報告」『烏魯木齊文史資料 第八輯』烏魯木齊：新疆青年出版社、1-20 頁。

盛世才 1937 「在蒙古勒代表大會上之督辦的講話」『反帝戰線』第 2 期第 2 卷、烏魯木齊：新疆民衆反帝聯合會、1-26 頁。

E. J. ホブズボーム 2001 『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫他（訳）、東京：大月書店
森久男 2009 『日本陸軍と内蒙工作』東京：講談社

(早稲田大学大学院博士課程)